



K A P P A N O V E L S

長編推理小説

輕井沢夫人

嵯峨島 昭

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。あら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号 112)

光文社 出版局

長編推理小説 軽井沢夫人

昭和 54 年 6 月 30 日

初版 1 刷発行

定価 600 円

昭和 56 年 11 月 1 日

5 刷発行

著 者 嵯 峨 島 昭

発 行 者 大 坪 昌 夫

印 刷 者 鈴 木 貞 三 郎
東京都文京区水道 1-2-1
公和印刷

発 行 所

東京都文京区音羽 2
振替 東京 6-115347

株式会社 光 文 社
電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Akira Sagasima 1979

(分) 0-2-93 (製) 02374 (出) 2271 (0)

Printed in Japan

長編推理小説

かる い さわ ふ じん
軽井沢夫人

さ が しま あきら
嵯峨島 昭



カッパ・ノベルス

『輕井沢夫人』目次

作家の別荘	5	夫人との別れ	161
アルバイト・ウェイター	11	酒島 さかじま 警視の調書	171
女レストラン主の話	25	離婚の請求	183
パーティーの屈辱	32	ホテルの演奏会 コンサート	194
暴れ馬	53	富豪説得	207
家庭教師	69	カセットの秘密	221
テニスの相手	92	意外な犯人	240
ゴルフ場の殺意	127		

イラストレーション

滝瀬源一

一章 作家の別荘

「涼しいな、軽井沢の夜は。昨日までの東京の暑さが嘘うそのようだ。……この別荘にこもっていると人も来ないから、原稿がはかどるだろう」

と、ゴルフ服のがっちりした男が、ウイスキーのグラスをあげながら言った。

「いや、かえって頻繁ひんぱんに編集者が押しかけてくるよ。一度の軽井沢出張で何人もの作家のところを、まとめてまわれるから、東京より便利らしい」

と、浅間自然石の暖炉の前で、部屋着姿の主人が、ブランドランデーグラスを口に運びながら、

「しかし酒島さかじまは、よく休みがとれたな。忙しいんだろう」「いや、警察庁刑事部理事官なんてのは、閑職でね。ていのいい隠居仕事だが、そのかわり、やりたいことだけに、いつまでも首をつっこんでいられるから」

そうゴルフ服の男は答えて、もう一人の、やや年長の男を振り返った。

「松崎さんは忙しいでしょう？ なにしろ県警の刑事部長といえど激職だからね」

松崎と呼ばれた、きちんと背広を着た、瘦うすせた男は、ソファの上で背筋を伸ばしながら、

「そう……しかし、どんなに忙しくても、年に一回ぐらいいは、こうして集まって、ゴルフをやりたいですね」

「練習の時間がないから、なかなか上手にならないが、コースに出るだけでのんびりするからね」

酒島警視が言ったとき、とつぜん遠くで、パトカーのサイレンが響いた。

「交通事故かな。場所はどのへんだろう」と酒島は耳をすませた。

「あの方向だと、今日まわった旧軽ゴルフ場の近くだ。鹿島の森あたりだな」

「聞いてみましょう。県警本部の連中がいま軽井沢に出張して来いますから」

と松崎が電話室のほうに歩いていった。

「休めない男だな、あれも」と酒島が言った。

「君も同じじゃないか。警察庁の役人のくせに現場の捜査一課長あたりがキャップの仕事に、うしろから首を突

っこんでいる」

「少し離れた立場から事件を見直すのも、僕の仕事なのだ」

松崎がもどって来た。いつも冷静な顔が、珍しく昂奮して、輝いていた。

「事件になるかもしれないよ。……鹿島の森に岡崎という実業家の大別荘があるが、その裏庭で、死体が発見されたんです。いま、鑑識の連中が、現場に向かっています」

二人は黙りこんだ。酒島はグラスに氷とウイスキーを足して、飲みはじめたが、ふいに立ち上がった。

「どうも落ちつかないね。目と鼻の先に現場があるのは……松崎さん、あなたの顔で、われわれを現場に入れてくださいよ」

「そうですね。私が最初から直接、現場に立ち会うのは異例なんだが」

「だから、捜査に口を出すのじゃなく、部下たちの仕事を視察して、第一線の捜査官たちへの認識を深める、ということでしょう。立派な大義名分だよ」

と、取材意識をそそられているらしい作家も言った。

「よし、じゃ出かけますか」

と松崎刑事部長は立ち上がった。

「車を出させよう。歩いても行ける距離だが」と作家が言って、外出の仕度をしに、階段を上がっていった。

——関東産業会長、岡崎善之助の大別荘の門は開け放たれ、パトカーが止まっていた。三人が車をおりて中に入ろうとすると、見張りの制服警官が、

「どなたでしょうか」

と止めた。松崎が名乗って灯りに顔を見せると、若い警察官は電気に打たれたように反りかえって、敬礼した。ヘッドライトで闇を掃きちらしながら、もう一台の車が到着して、松崎の顔見知りの県警係官が出てきた。

「部長じきじきの来臨ですか。これじゃ現場が張り切って仕方ないですね」

と言いながら、先に立って案内した。

庭は奥深く、水銀灯に照らされた道は曲がりくねって、門から現場まではかなりの距離があった。寒いぐらいの気温で、苔と樹々の匂いが強い。

投光器に照らされた現場にはロープが張られ、四、五人の白衣の鑑識課員が、カメラやメジャーを手に、動きまわっていた。ロープの中に土が盛り上げられ、穴が見

え、黒ずんだ頭と衣服らしいものが、ちらと見えた。

「松崎刑事部長だ」

と案内の係官が言い、

「やあ、ご苦労さん」

と松崎が気軽に声をかけた。しかし現場の連中はそんなに頭を下げてだけで、手を止めようとはしなかった。お偉方の早々の来臨を多少、迷惑がっているようだった。親会社の重役が視察に來ても、挨拶もせずに仕事に熱中している建築下請け現場のベテラン大工たち、といった職人氣質が感じられた。

「今年もそろそろ別荘を開けるといいうのでね。管理人が掃除に入っていたんです。仕事がおくれて夜までかかったので、管理人の中学生の息子が、弁当をとどけに來た。その息子のつれて來た犬が、ごみ捨てのために、管理人が昼間、掘った穴に飛びこんで、その底を掘ってね、気が狂ったように吼えるんです。息子が好奇心を起こしてスコップでさらに掘ってみたら、人間の腕がニューツと出てきた。びっくりして父親に知らせた、父親が一一〇番したというわけです」

案内の係官が説明してゐるうちに、鑑識課員たちは仕事を終わって、ロープの外に出てきた。一人が案内の係官

に言った。

「現場はこのまま保存しておいて、明日の朝から、検事さん立ち会いで調査をはじめます。今日はこれで終わります」

「ホトケは現場においとくのかね」

「はあ、今夜は動かしません。見張りはつけておきますが」

「じゃ、これ以上いても仕方がないな」

と松崎は言った。

「われわれは帰るか」

と酒島警視も言った。

三人は旧軽銀座近くのスナックで車を帰し、ビールを飲み直し、深い森の中をぶらぶら歩いて、作家の別荘にもどった。

「じゃ、おやすみ」

「おやすみ、明日のセブントーは、九時スタートだな」

「八時に起きれば間に合うよ。おやすみ」

三人は挨拶を交わして、それぞれの寢室に引きとった。

——翌日の午後、三人は72ゴルフ場のコースをまわり、近くにある殉職警察官の碑に黙禱してから、国道十八号近くの新井沢警察署に立ちよった。昨日の係官が三人を、

署餐室に案内した。警視正の階級章をつけた制服の署長は松崎とは旧知の間柄だったが、警察庁の酒島や作家とは初対面だった。

「昨日はわざわざ、現場にお越しいただきましたそうで、さっそく係官を呼んで、説明させますから、どうぞ」

初老の係官が、紙袋に入れた資料をかかえて入ってきた。

「ホトケの心臓に達する刺傷がありまして、まず他殺であることは間違いないと思われます。被害者はいたみ方がはげしく、くわしいことはわかりませんが、十七、八歳から二十七、八歳の若い男です。身長百七十センチ、血液型はA型。べつに、顕著な肉体的特徴はありません。着衣はテトロンと木綿のワイシャツに木綿のブリーフ、デニム地のズボンです。メーカーその他は、いま鑑定中ですが、この線からはまず、身もとの調査は困難でしょう。死後の経過時間はいま鑑定中です。別荘の持ち主は外遊中で、連絡がとれません」

「ほかに、何か持っていたかね」

「学生証らしいものがありますが、これも損壊がはなはだしく、大学名も本人名もよく読みとれません。しかし、さらに調査をつづけて、各大学に照会を出す予定です。」

それから……」

係官は別の袋から銀のペンダントを出した。

「これが、被害者の首にかけてありました。さいきんは男の子でもペンダントをするんですね」

酒島が手にとつて、その小さなペンダントを眺めた。咆哮する獅子の顔をかたどつてある。その表情が、奇妙に若々しい感じである。裏に、SILVER、K・Mと刻印がある。

「これは彫金細工だな。手作りの品だから、作った人はわかるはずだ。もっともさいきんは彫金ブームで、習っている人がずいぶん多いから、さがすのは大変だな」
「大変でも、さがします。それがわれわれの仕事ですから」

刑事部長を意識してか、係官は元氣よく言い切った。
「具体的には、どうする予定だったかね」
と署長が聞いた。

「とりあえず東京と長野市内に目標をしぼつて、彫金家や彫金教室をピックアップします。刑事に写真をもたせて、一人一人当たられます。K・Mのサインもあるし、自分の作った作品ならわかるでしょうから。それから、誰に渡ったかを調べてゆきます」

「東京にも県下にも該当者がいないときは？」

「全国に照会を出します。例の学生証の線からも、どこ
の大学の学生かぐらいはわかると思います」

「それも大変な手間だな。さいきんのマンモス大学は学
生も多いからな」

「捜査会議の結果、すでに専任の刑事を二人、東京に出
発させております」

「うん、わかりました」

係官が出てゆこうとするのを、酒島警視が呼びとめた。

「ちょっと、そのペンダントの写真はあるかね」

「はい、あります」

「じゃ、悪いが一枚くれないかね」

「承知しました。全国に照会することを考えて、余分に
焼いてありますから」

写真をもらって酒島は立ち上がった。ジープで県警本
部へ帰る刑事部長と別れ、作家と二人で、待たせておい
たタクシーに乗った。

「軽井沢の店についての情報は、どこでわかる？」

と酒島は作家に聞いた。

「さあ……うん、旧軽銀座に軽井沢新聞社というのがあ
る。ガリ版ずりのミニコミ紙だが、商店の広告を入れて

いるから、あそこならいちばん知っているんじゃないか」
「連れていってくれないか」

進入規制がされている旧軽銀座の入口で、古い友人同
士は車をおりた。梅雨が上がり、始まったばかりの夏の
光が道路に降りそそいでいる。白っぽいよそおいをした
若い男女が、群れをなして歩いている。今年はハーレム
パンツという、だぶだぶズボンがとくに目につく。

風船売りが出ている。キリスト教のパンフレットを配
っている外人がいる。

「ここだ」

と作家は「軽井沢新聞社」と染めたのぼりの立ってい
る、小さな店を指した。

「よし、入って聞いてくる」

「僕は隣りでコーヒーを飲んでいるからな」

隣りの喫茶店に入った作家と別れて、酒島警視は、新
聞社という名の小さな土間に立った。入口に立っていた
青年が、ガリ版片面ずりの新聞を渡した。

「お持ちください。無料です」

紙面は軽井沢の店の情報や、軽井沢のゴシップで占め
られていた。ちらと目を走らせて、酒島は、

「ちょっと、軽井沢の店のことで聞きたいんだがね」

と言った。

「それじゃ、二階に上がってください」

二階は十畳ぐらいの汚ない、畳じきの部屋だった。中央のテーブルでは色とりどりのガラスをひろげて、軽井沢の有閑夫人たちが、ステンドグラス製作の実習をしていた。

靴をぬいで、酒島警視は入った。窓ぎわに机と電話があり、アルバイトらしい青年と少女が、電話番をしていた。

その青年に酒島は聞いた。

「軽井沢ですな、彫金アクセサリーを製作販売している店はありませんか」

「ああ、すじ向かいの、ベルコモンズのアクセサリー屋で、去年、先生を呼んで来て、製作指導販売をやりましたよ。今年はうちで別の先生を呼んでステンドグラスをやっていますけどね」

「今年は彫金はやっていないの？」

「はい、アクセサリー屋は店を出していますですが、しかし、先生は来ていないようです。去年、あんまり生徒がいなかったものだから。軽井沢はやっぱり、七宝しっぽうとか焼き物のほうが、かんだんでいいみたいですね」

（地元警察は、軽井沢は田舎で、彫金教室などないと思ひこんでいる。夏の出店のことを忘れていたんだな）

酒島警視は頭を下げて、ギシギシ軋軋む階段をおりた。旧軽銀座を少しのぼって右側の、ベルコモンズという名店街に入った。

アクセサリー屋はすぐにわかった。大柄な、間のびした目鼻立ちの娘が、ぼつんと店番をしていた。

「警察のものです」

と酒島警視は手帳を見せた。娘は、はっとおどろいた表情になった。

酒島警視は、できるかぎり優しい声を出した。

「正直に教えてほしいんだがね。このペンダントに見覚えはあるかい？」

内ポケットから出したペンダントの写真を見て、娘は叫びかけた。声を吞んで、両手を握りしめた。

「知っているみたいだね。正直に教えてくれないか」

「これ……これ、私が、彫金の先生から作っていたいたんです」

「先生の名前は？」

「町田京子」

「君はその彫金教室のお弟子さんなのかね」

「ええ」

「夏のあいだは、先生の作品を出している店を、任されているわけか。このペンダントは、売ったの？ 誰かにあげたの？ あげたんだね」

「はい。去年、お友達に」

「若い男の友達だね」

「……はい」

「誰だい、その人は」

「この裏の、チェザレという、ブチック兼レストランの……レストランのウェイターしました、学生アルバイトですけれど」

「その人の話を、してくれないかね。できるだけ正直に」

「は……はい」

と娘は、奮^{きん}えてうなずいた。

「ちようど去年の今ごろなんです。紫藤^{むらさぎ}さんが、軽井沢に来たのは」

ベルコモンズの道路は若い客でいっぱいだったが、この店にはちようど客もなかった。ときどきつまりながら、娘は昨年^{さくねん}の夏の、青年との出会いを語りはじめた。

二章 アルバイト・ウェイター

一年前——。

「そよかせ二号」は軽井沢駅にすべりこんだ。

紫藤^{しどうじゆんいち}純一はラケットとボストンバッグをかかえて、立ちづめのデッキから、プラットフォームに押し出された。日ざしは強いが、風は涼しい。駅前から出ているバスに乗りおくれまいと、先を争って階段を走る人々を、侮蔑^{へいめつ}的な目でしばらく眺めていてから、純一ははじめて階段に向かった。

この侮蔑^{へいめつ}的な顔つきは、集団でうごめいている連中を見るときに、彼がきまって浮かべる表情だった。整った、ちよつと冷たい彼の美貌にその表情はよく似合った。

しかし遅かれ早かれ彼はいつも、その侮蔑^{へいめつ}している大衆と、同じ行動にうつらねばならないのだった。

彼は軽井沢にヘリコプターで飛来できる財力もなければ、プラットフォームにロープを張らせ、警官に護衛させ、駅長に先導させて迎えのVIP専用車に乗りこむ身

分でもなかった。現実の彼は学資不足で大学にも行かず、今は軽井沢にアルバイトのレストラン店員として一夏を過ごしに來ただけの、貧しい青年にすぎなかった。

人波のあとから階段をのぼりながら、自分の現状を思うと、彼の表情から傲岸さは消え、かわって、痙攣的に苦痛が走った。

貧しい彼に多少の自信をもたせていたのは、自分の容貌と、テニスの腕前と、自分ではあると信じていた才氣だけだった。

テニスについては彼は高校時代、地区代表にまで選ばれていた。才氣については自分の好む学科ではずば抜けた成績で、とくに記憶力に自信があった。しかし奇妙な気位の高さから、彼は現代の青年には珍しく、女友達というものがなかった。

何人か、彼に恋文をよこした少女や、交際を申し込んできた同級生の娘もいたが、いつも彼は年に似合わぬ冷然たる態度で、相手にしなかった。

(よっぽど美しい、教養ある、財産もある女でなければ、自分の恋人にふさわしくはない。もちろん、処女でなければならぬ、ほかの男に、目もくれてはならない。)

……もし自分の「寵を受ける」女がほかの男とも交際したら、その女は罰を受けねばならない)

そう、彼は信じていた。

貧しいにもかかわらず世間しらずで、男女関係についても全く無知な彼が、考えたその「罰」とは、要するに、その空想上の恋人に冷たくし、絶交を申しわたす、というだけのことだった。それで相手の少女は十分に絶望し、悲嘆にくれるにちがいないかった。

こうしたうぬぼれと、誇大妄想に加えて、彼に、女友達ができないのにはまだ理由があった。それは彼の、極端な羞恥心と、子供らしい臆病のせいだった。しかし、この二つだけは、彼は死んでも認めたくなかった。

「自分は義務のためには恥しらずにもなれる。それに自分は、決して臆病ではない。少なくとも自分は、華々しく戦って死ぬのは決して怖くない……」

自分を納得させるために、彼はしばしばそう独り言を言った。

彼が自分に課していたその義務というのは、今のところ、二つあった。一つは女たらしになること。一つは大金持ちになることだった。その実績は、女については彼はまだ一人も知らず、全財産は七千円と百円玉、十円玉

が少々といったところだった。しかし、気にすることはなかった。彼はまだ、人生のスタートについたばかりだった。

そして、この軽井沢こそ、その二大目的に向かつての本当の意味でのスタート地点になりそうな気がしていた。若い娘たちが開放的な気分で集まる避暑地。歴代首相のほとんどが別荘をかまえ、日本の上流階級の多くの家族が休暇を過ごす、夏の一月だけの街で、成功のきっかけはつかめそうな気がした。

（店には今晚、入ればいい……。今日一日は、自転車で敵地の偵察でもするか）

駅前の二軒の自転車屋は貸自転車店のダンピング競争をしていた。その安いほうから、さらにいちばん安い、旧式の自転車を半日借りて、紫藤純一はラケットとポストンバッグを荷台につけた。自転車屋でくれた地図を見ながら、旧道に向かう道を走り出した。

「万平ホテル」の矢印の指すほうに右折してみる。林の中にテニスコートが幾面もあり、暇のありそうな少女や青年がラケットを振っている。自転車を止めてしばらく見ていたが、みな純一より、かなり腕は落ちるよう思われる。

ふっと純一は、こうしてコートをのぞきこんでいる自分が、物欲しげに見えるのではないか、という思いにとらわれた。しかも自分は自転車にラケットをしぼりつけている。自分は、この同年配の連中から声をかけられ、さそわれるのを待っているように、見えるのではないか。乞食のように！

これは被害妄想だった。そう知っていても屈辱と怒りは消えなかった。さも急用を思い出したというふうに彼はペダルを踏んだ。白球と若々しい歓声から、一刻も早く遠ざかろうと全力をあげた。

怒りの余波が太腿に、新鮮な血を注ぎこみ、彼はたちまち何台もの自転車を追いぬいた。顔を撫でる涼風、めまぐるしい木洩れ日の交錯、全身の筋肉の躍動に、やつと彼は、感情の平静をとりもどすのだった。

汗をかき、荒い息をつきながら、万平ホテルの前庭に自転車を乗り入れた。

ここの、庭に張り出した喫茶テラスも、若い男女でいっぱいだった。

（喉が乾いたな。アイスコーヒーでも飲むか）

と思った。しかしすぐに、

（女たらしを志している自分が、相手もなく、たった一

人でコーヒーを飲むのか！

と、反省して思いとどまった。貧しい所持金は、自分にふさわしい高貴な美女と費うときまで、一銭も無駄づかいではできなかった。

道を引き返して、六本辻から雲場の池に出た。池のまわりもそぞろ歩く若者たちで賑わい、それを目当てのトウモロコシ屋も出ていた。しかし彼は、ちらと一瞥をくれただけで、まっすぐ別荘地に入り入れた。

左右には鬱蒼たる樹と苔と芝生の、広大な庭がひろがっていた。はるか奥に、大別荘が点在して見えた。自然石の門柱の表札は、いずれも有名財界人か、でなければ、かつて政界で鳴らした人の姓だった。

無造作に乗り捨てられ、木洩れ日に輝いている車も、ロールスロイスやベンツ・リムジンだった。

樹々をすかして見えるその別荘は、いずれも窓が開かれ、持ち主かその家族が来ていることを示していた。その絵のような世界の中で高級別荘族たちは、ほかの種属を峻拒し、自分たちだけの優雅な暮らしを楽しんでいるにちがいがなかった。

それを羨ましげにのぞきこみながら、観光客が歩いていった。その連中の中に、五千円紙幣を一枚にぎって遊び

にくる青年や少女も、民宿に泊まっている家族連れサラリーマンも、紫藤純一の仲間の軽井沢アルバイト族も、入るのだった。

しかし、通行の誰の表情にも、自分が別荘を持ってないことの怒りや苛だちは見られなかった。たとえ数日でも、蒸し暑い東京をはなれてこの避暑地で過ごせることで、別荘族たちの贅沢をよそながら見ることで、観光客は満足していた。平和な顔つきでそぞろ歩き、あるいは一人乗り、または二人乗りの自転車走らせていた。

ただ一人、紫藤純一だけが違っていた。こうした贅沢の匂いを嗅ぎ、自分がそこから拒まれているのを知ると、嫉みと怒りでこめかみがふくらみ、整った顔が険しくなった。

(この別荘地は二千坪はあるな……軽井沢の最高の場所
は坪三十万するといふから、六億円か……建坪も百坪は
あるから四千万……何やかで七億はかかるな。あ、次の
は広い。敷地は一万坪はあるぞ。それがぜんぶ苔をしき
つめてある。遠くに見える別荘も二階建ての純和風だ。
建物抜きでも三十億というところか。しかし自分はこれ
からの一生で十億も稼げるだろうか……十億残すといふ
と、税金九割引いて百億もうけないと。……しかし自分

は学歴もコネもない。ああ、どうしたらいいのだろう。しかし彼の考えは、決して革命という方向に向かわなかった。彼はあくまでも、資本主義社会の成功者として、こうした大別荘の主人になりたいのだった。

（これらの大別荘も革命で平等に分割してしまえば、一人当たりの持ち分は公団住宅よりもっと狭くなり、美しい避暑地の自然も破壊される。それはナンセンスというものだ。しかも、そもそも、自分だけが持っているから幸福なので、みんな同じでいどに持っていたら、全員が不幸になるだろう。だから平等主義とは国民を一人残らず不幸にする制度なわけだ。……もつとも現実には、社会主義社会では資本主義社会の大富豪にかわって、政府や党や組合の要人がボディガードにかこまれて住みつき、一般大衆はやはり、これらの別荘の持ち主になれないことは同じだが。

ああ、自動車がずらりと違法駐車しているな。クルマで来た若者たちは車内に女の子を引っ張りこんで泊まり、別荘の庭に入りこんで焚き火をし、ゴミを散らかし、ラジオを鳴らし、ギターを鳴らして夜明かしするらしい。しかし、それも彼らが上流階級に対して怒りを燃やしているからではないのだ。動物のように盲目的に、精力を

発散しているにすぎないんだ。馬鹿な連中めが……。

もつとも、さいきんは大会社は軽井沢に寮をもって、社員やその家族が交代で利用しているそうだ。それで大衆は一泊だけの上流階級になったつもりになるらしい。しかし、自分はそれではいやだ。あくまでも、主人となつてあの別荘を所有したいのだ。そこで、映画女優のような美女をつぎつぎともてあそんで捨てて……ああ、それができないくらいなら、死だ。自殺あるのみだ。豚のように生きて何が面白いんだ）

嫉妬に盲目になり、こんな美しい別荘に住んでいる連中を押しのけて、自分がつてかわりたい、という欲望に夢中になっていたので、紫藤純一はせっかくの風景や、涼しい風や、樹々の匂いを楽しむどころではなかった。

彼は有名な古い教会のそばに出た。軽井沢名所のこの場所には車や自転車、人が集まっいて、自転車は徐行せねばならなかった。

何の特徴もなく美しくもない素朴な教会では、いま結婚式が終わったらしかった。白いベールの花嫁が花婿に手をとられ、うつむいて出てきた。友人や観光客のカメラが二人に集中していた。

結婚式には、彼は何の関心もなかった。花嫁をちらと